

ハラハラ・ドキドキから一転ホッ！

—徐士蘭・来日ビザが下りるまで—

奥村正雄

■「祖母は焦ってます」

「ニイハオ！ まだ黒竜江省から何の連絡もありません。おばあちゃんは焦っています。でも仕方ありません。待つだけです。でも間に合うのでしょうか」

このメールは私が3月11日（金）の朝6時5分に送ったメールに対する徐士蘭さんの孫娘・孫洪波さんから届いた返事だ。東北大震災が起きたのはこの8時間後である。徐士蘭さん一家は、訪日ビザがいつまでも下りない事態にイライラしながら、この日本の大災害のニュースに接した。彼らは私の家が大震災の現場からどのくらい離れているかも実感できないまま、「中国の私たちのもとへ避難して来ませんか」とまで言ってきて私を感動させた。

震災のニュースと徐士蘭のビザが下りない重苦しい気分の中で、私は「時間」に追い詰められて行った。昨年暮れから仲間と決めて、徐士蘭側にビザの申請書類を出してもらった時に決めた来日日程は、3月23日から4月1日までの10日間である。その日が刻々近づいてくる。私たちはついに決断した、延期やむなし、と。徐士蘭母娘が10日間宿泊するホテル、東京と千葉で「励ます会」を開催する会場、富士山と桜を見て心を休めてもらう西伊豆の宿…などなど、すでに徐士蘭を迎える準備は90パーセント出来上がっていた。これをご破算と決めて徐士蘭に知らせ、ホテルのキャンセル、歓迎会場の延期依頼、「徐士蘭を囲む会」の案内を届けておいた人たちへの「延期のお知らせ」はがきの発送などに追われた。これが終わって、むしろ気持ちのイライラが少し落ち着いたところへ、孫洪波さんからメールが入った。

「待ちに待ったビザが下りました。昨日、私達はハルピンへ行き、手続きをしてビザをもらって帰りました。ビザの最終期限は6月18日になっています。いつ訪日したらいいか、知らせてください」

■峠で振り返る

3月22日、13時41分である。私は峠で立ち止まり、登ってきた山道を振り返りで

もするように、ここまで息もつかずに走ってきた、あれこれを思い出していた。ビザの申請書を年が明けたら方正人民政府の外事弁公室へ出すように、と送っておいた申請書類に不備が出て書き直しや、有効期限が3か月の身元保証人の証明書の期限切れなど、こちらの不慣れと手落ちで何度も送り直しをし、いよいよ黒竜江省の関係窓口へ行ってもらったら、あらかじめ旧知の省外弁主任Pさんに書留速達で送っておいた依頼の手紙が、省内の手違いで届いてないことがわかって急きょ、やはり旧知の省外事弁公室JさんにSOS。零下30度の早朝の高速道250キロを祖母を乗せて走った孫の洪波さんから電話が入って、その場にいたJさんと代わる。

「担当の者がもうひとつこういう書類を送ってもらってくれと言うんですよ」

予想しなかった別種の証明書を送るようにと言われて急きょ手配。闘病中の身元保証人Iさんにこれ以上負担を掛けられないと判断、代わってもらった吉川雄作さんに区役所へ急行してもらって隣の郵便局で落ち合い、その場で三女のもとへ送った。

ようやく黒竜江省の審査をクリアして書類が瀋陽の日本総領事館へ回ったのが2月12日だった。「黒龍江省から領事館へ回れば、10日間くらいでビザが出る」そう思い込んでいた私は、ようやく鼻歌気分になっていた。2月20日過ぎくらいには孫さんから「来ましたヨ！」という吉報が届くだろう…。しかし、来る日も来る日も「還沒有」（まだ来ない）…いくらなんでも2月中には…私は毎日、孫さんと他愛もないメールのやりとりを楽しみながら、もう12年前に癌で三分の2を失なった胃の底に沈んだ鉛が次第に重くなっていた。そして1か月目にあの大激震である。

■地震を予知か！？

私は地震の衝撃から落ち着きを取り戻した時、不思議な感慨に襲われた。

<瀋陽の領事館は、もしかしたらこの大地震をひそかに予知していて、ビザの発行を故意に引き延ばしてくれたのではないかと>

もしも予定通りにビザが下りて、予定通りに二人がこの大混乱の日本に来ていたら？…私は下戸の吉川さんと盃の代わりにコーヒークップをカチッと合わせて乾杯した。そして改めて来日の日程を決めた。ビザの有効期限ぎりぎりの下記の通りである。

6月8日（水）来日

11日（土）午後1時から千葉・幕張「まあぶる」で「励ます会」

12日（日）午後1時から東京・方正友好交流の会で「励ます会」

17日（金）帰国

これまで多くの方からカンパと励ましをいただきました。有難うございました。これからさらに厚労省へ提出する署名などもお願いしたいと思います。どうぞよろしく願い申し上げます。 問い合わせ **☎043-272-9995 奥村正雄**

カンパ振込先 京葉銀行415-4933601 徐士蘭を日本に招く会